芳川地区 18 ケ町の由来

参野町（さんじのちょう）

古文書には、参神野としるされている。
参野という地名の由来については、「風土記伝」によれば、「三神野斎海神三座」とあり、勧請当時の津毛利神社（昔は、この地方四六ヶ村の大氏神であった関係から「四六所大明神社」と称されていた）の祭神が底筒男之命・中筒男之命・上筒男之命の海神参座であったところから参神野と呼ばれた。後、不敬にあたるとして神の一字を除き参野としたという。

西伝寺町（せいでんじちょう）

西伝寺というのは、浄土宗の古刹である源宝山松寿院西伝寺があるので、これが地名になった。
浄土宗を開かれた法然上人は遠州浜岡の桜ヶ池の応声教院からの帰途、同道していた愛弟子の西伝に命じてこの土地に草庵を作らせた。西伝寺本堂前庭の「いぶき」の古木は法然上人の手植えといわれ、浜松市の天然記念物である。
この西伝寺は遠州西部の本山格で、一時は末寺３０寺近くを持つ中心寺であった。

頭陀寺町（ずだじちょう）

頭陀とは梵語を出典としている文字である。
衣食住に対する貪欲を払拭する修行で 12 種あるといわれ、頭陀寺とは、そのような修行をするお寺ということである。円空上人が開山したと伝えられている真言宗の古刹・青林山頭陀寺は大宝三年（703 年）に開創されている。
この頭陀寺は鴨江寺と龍禅寺と共に、浜松地方の真言宗の三名刹である。この頭陀寺を中心として村が発展し、寺号をそのまま村名とした。
また、松下屋敷や鎌研池の史跡がその面影をとどめていて、若き日の豊臣秀吉すなわち藤吉郎が草刈り人夫や、作男だった頃の姿をかいまみる事が出来る。

恩地町（おんじちょう）

昔、大柳郷の上名職・下名職に分かれていた頃、楠氏の遺臣と称する太田政友の子、彦十郎政忠が住んでいた。この地の主、安間与三郎は貧困となり納税出来なくなり、領主今川氏真に安間家所有の田地を取り上げられた。政忠の母は、安間氏の出であったので、金を出して税金を払ってやった。氏真は政忠に田地を下賜した。安間与三郎は村民に多額の前借をしていたので村民がその田地をかえせと迫った。そこで政忠は、この土地は領主より、「四六ケ所大明神」と白山権現の神田と共に与えられたとの免祖の宝印を示したので、村民は納得した。今川氏真はその義に感じて、この土地は大守の恩の地であると、この土地を与え恩地と村名をつけた。

石原町（いしはらちょう）

「遠江風土記伝」によれば、「石原」の項に「石高は一八二石四斗一升、昔洪水の時、豊田郡内石原村流失す。村民ここに移って一村となる、故にこの村あり」となっている。
天竜川の氾濫で上流の石原村（今の笠井地区）の人たちがここに移って作った集落という。
天竜川が幾条にも流れていたころ、ここらあたりは河原だった。常には水はないが、一度豪雨でもあると、濁流の通路と化してしまう。
河原だったから石が多く、耕作には適さない原だったので「石原」とよんでいた。今でも深く掘ると石が出てくる。
また、毘沙門寺に市の文化財に指定されている木造の毘沙門天の立像がある。

安松町（やすまつちょう）

元禄二年（1689 年）今の愛知県津島市の牛頭天皇（スサノオの命）を祭神とする津島神社より、ご分霊をあおぐ際、津島市の郊外の安松町より出張された神官がこの土地に土着され故郷の安松の名をこの地に命名した。
また、安間川がこの地に流れていた頃、川が海に注ぐ所を津とよび、安間の津で「ヤスマツ」となったともいわれる。
一般には、安松という人が死んで、この安松の亡霊が闇夜に鬼火となって現れた伝説によるとも言われる。